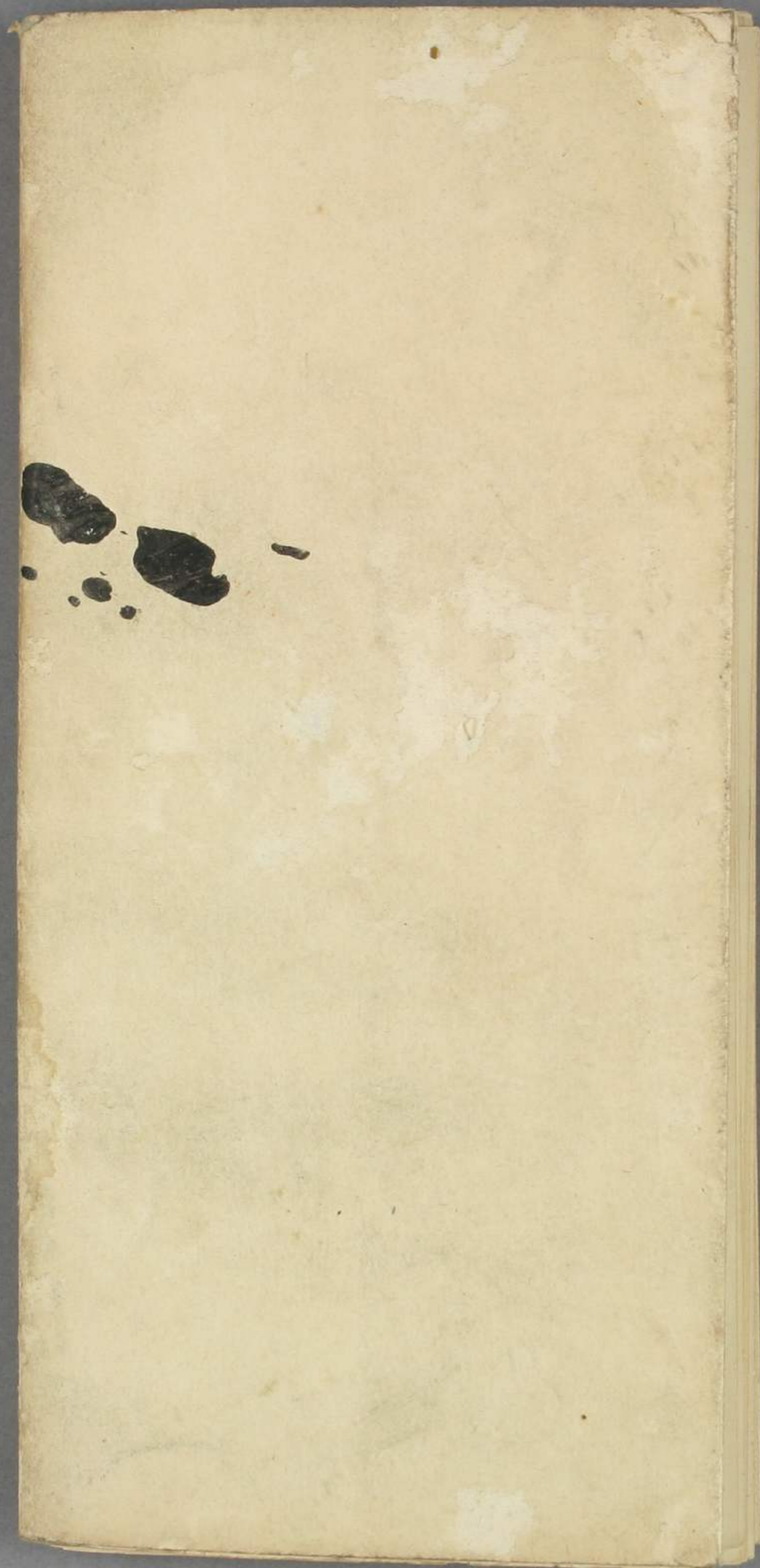


小  
蔵  
第  
十





小  
石

蔵

蔵

55 60 65 70 75 80 85 90



小  
扇









われわかうてちさき扇のつまかげにかく  
れて観たる戀のあめつち

あ  
き

り 梶 夏 笹 ひ  
つ 花 ば し  
く 　 　 　 か 目  
ゝ 染 な 舟 夜 次

音 靜 動 彩

(冬) (秋) (夏) (春)

挿畫目次

藤  
島  
武  
三  
作

小 扇

與謝野晶子著

みじか夜

われと歌をわれといのちを思むに似たり  
戀こひの小車こぐるま絃いとさらさらいそに巻け

數の罪の名知らばとくに老いぬべきを長  
しと愛でし髪よ幾とせ

枕それし晝のかりねの夢や夢戀する人に  
春雨ぞ降る

澤瀉さわだは少女なごめの權いにのりこしぬ君が醉歌まどの  
七尺小舟ななせふね

めしひなれば道と誨へで往かしめよかど  
る變じて百合となる門かど

おもはずや濡るれば髪はやはらかき雨ふ  
る春を道にやつるる

君さらばさらばはたし二十はたしを石に寢て春のひか  
りを悲み給へ

御僧追ひてさせかけまつるわが小傘すす  
きに白き夕雨の秋

鸚鵡うちし紅水仙の花の葵へかごと朝  
の人と鳥と見る

瀬田いでて宇治に流るる春のみづ柳なが  
うて京の子みえぬ

戀に老いし神のぬけ羽の身はここに小羊  
君が檻の幸よむ

池におちて紅きが多きおちつばき鶯鳥か  
ひにし家の岡崎

海に入りて海にさくべき春の君と或ひと  
見たる白牡丹の花

手に満ちては幸に泣きしを人も知るや矢  
かひし笑みぞ詩に不如意無き

草ちかうよき蚊帳たれし竹の椽妻に眞白  
の扇ゆるさぬ

友は人に摘まれぬ我はたふとくて聖の宮  
居にいつかれ白百合

旅のきみ君あさ髪の裾によれ露のさむき  
に誰ぞ君をやる

妻わかうて京のなまりの失せがたな二條  
に似たる街の春の夜

尼の君に水しら蓮の夜あけ舟京の几董が  
詩のけしきかな

春むかし夢に人見し京の山の湯の香に似  
たる丁子の小雨

とが有りてたそがれ島に流されしちさき  
花神か待つひとりひと

平和の神の御帖に名もあらむとおもふ我  
ぞ老いにけらしな

酔へる蝶は小百合のほか花しらず幸あ  
るかなや瞳ちさき君

さくら花ちる夜のもこのうつつひと戀は  
よそ目のかなしきものか

大和こゆる歌のひと夜の長谷の寺雨よ細  
うは降りぬるものか



もどめむの水はいなみぬ戀さらに秋のこ  
とばを石に語らせむ

うらわかき胸あふれたる息の香を紅べにのか  
をりと君きくらむか

初日かげわがこの君を誰にやらむ北なる  
帝ていに戀は足らずよ

しら梅に妻袖つまそでながきわか水やひがし幸さいは  
げ笑ます詩の朝

祈り得し後のひと夜の春の人みじかき春  
の人に梅ちる

縹色はなださびし森の被衣かきぎに戀のむかしわかき  
武藏ぶさうを小川せがわかたる日

をしへます二十はたちは知らず袖でまり妻には  
あらぬ美しくしき子を

病むひとの母屋かやのすだれに螢やりて出づ  
る車の君が夏姿

芍薬しやくやくに毒さす夜の濃青雲こゝろはしるすがたに  
笑む子見つるや

歌しらぬ身は要もなき夕ぞとうたれた寝な  
さむひと時たまへ

讃たたせむにおん名は知らず大男花おほなをこに吹かれ  
ておはす東大寺

夜の室むろのしら梅透うめる八重やえころも御母おんははの神  
に夢よはぐるな

鐘につづくやさあしあとの堂の階陀羅尼  
日傘のなかにさそはむ

草に長き流の秋のふる川や緑に去りし夢  
の浮ばぬ

母にいにし昨日の魂や闇にまどふしら梅  
ちさき戸はうすみぞれ

わかき君のきさらぎ寒の堂でもり勢至菩  
薩に梅ねたまれな

(泣葉の君にまおらせける)

朝の湖に紫ときし春の君くる髪君に夢さ  
く秋か

手に袖に裾にはへ夏のうた椽の小百  
合に宵ふけらせよ

春



彩

人泣かせてわれと泣かるる恨おほき里居  
しぬればおとろへぬれば

春の夜を化物こほき木幡伏見相ゆく人に  
宇治は貳里の路

山吹の岡に伏目の春さめ雲さてうぐひす  
が上羽を洗へ

春ゆふべそほふる雨の大原や花に狐の睡  
る寂光院

忘れては柳にあゆむ大河ぞひ人の船夢の  
ろふ子ならぬ

仕へすがたわびては人やうつくしき殿の  
長階梨の春雨  
(京にあるしら梅の君に)

わがこころ何を追ふらむ片まどひ凝らす  
ひとみにはてし無き闇

山すみの深き井をくむ春のくれひと重山  
吹わが戀をるも

二の尼の紫衣にゆふべのうすざくら御供  
養はてし松が岡出でぬ

草の戸の西うす月の京は百里庭のしら梅  
母にちる夜か

連翹のとなりへそれて鶯は啼かず小竹に  
降る春の雨

躑躅あかき春眞言の大寺や山に浪きく西  
の讃岐路

袖もろとも枕まくらきては人ぞやはらかき腕かたむちし  
ろうて心飢ゑざる

さそはれし嵯峨はゆふべの水のさと兄訪  
ふ人にちひさう添ひぬ

細う降る雨の木蓮その里にひとり繪をか  
く君をしぞ思ふ

くらきかたにそらどけ長き宵の髪はべる  
ともなきしら菊の里

集に見るはみどりの春の夢すがた色なき  
石を巻く鬢の髪

ひとすぢにあやなく君が指おちてみだれ  
なむとす夜よるの黒髪

二もとのおどりぞ過ぐる松の君初日のか  
どは美しくしき歌

寒水に水仙さりし沙彌の袖もとより墨の  
袖と忘れぬ

君が榮は紅のゑんどの夢さまさま春を歩  
むに人才つたな

夜の牡丹うこむのさぬの香にやむせぶ螺  
鈿七尺藤の御屏風

春日いでて北薬師寺の杖の辻あゆみかく  
れて桃をねたみし

あと暗う去れなと云ひし昨夜の夢の中の  
一つを西野に追はむ



みだれ髪おもひ動くぞ秋によき戀の二十はたも  
を袂に秘めな

詩の愛着あいきやくよる方かたくらき子は幸無さいな二十はたもを出  
でし野の夕まよひ

ほこり、おどろ、笑みよ、問はずもありぬべし  
泣く日は我に戀やはらかき

ひと夜ゑにしひと夜の章の繪かたびら袖  
みづいろのひと夜みどか夜

笹舟

夏舟のうき葉の水の夜も見しか蓮なき里  
に人髪老いぬ

春むかし緋ざくら立てる花かけに少女の  
我となりける里

垣たまたま連翹黄なる春の小徑小雨の里  
の人に寄りこし

春の窓よるふる雨のささやきや琴にさし  
櫛ふれにけるかな

こむらさきうすれむらさき野の雨にわれ  
と別れし魂たそがれぬ

京の山の春のひと夜を母とよばむゆるせ  
かひなになれし子の夢

おつる裾にしら梅きゆる春髪の五尺を歌  
の妻が二十よ

夜は雨にわかたむ夢は坂こえず碓氷のあ  
なた里の名も知らぬ

(人の信越の旅にあるに)

門川にいくたり見たる朝髪ぞ老いにけら  
しなわが戀の夢

告げたまへ伽藍の九月興いかに金の柱に  
春を病みし君

(寺に入りし君に)

春の暮に實となる梅をうらみまますな今の  
世ぶりに口なれたまへ

強ひますなわれに初戀しのぶ戀御題にふ  
さふ今とおほすか

橋すぎて出町になほも二人なりき京さむ  
かりししら梅月夜

世や春や遠きゆふべや小鼓に御池の花の  
船の子なりし

楓こみちわかきふたりは御供の子眞淵の  
墓の南品川 (萩の家先生のみどもにて)

たのもしう米山こえて見む雲にうつれと  
撫でし髪にやはあらぬ

春とのみいなせし興を追ひわびて桃に指  
かむたそがれの壁

夏



動

層塔の春曉露のかたむらさき岡崎朝の御  
夢に入るや

梅にしのお頭巾なさけの水浅黄浪速は闇  
の宵の曾根崎

黄金雲は精舎花ちるかぎろひか山の夕鐘  
京にはぐれぬ

京の山を東へ歌の君やりて身はしら梅に  
たそがれの人

誰<sup>た</sup>ぞ誰が子細<sup>ほ</sup>江舟<sup>け</sup>やる一<sup>ひと</sup>重<sup>へ</sup>ざくら月の旅  
ひと戀<sup>こ</sup>なしにして

師なる君の眉いたみある朝あけを船<sup>ふね</sup>うた  
優<sup>やさ</sup>に掉<sup>さ</sup>す近江舟

詩僧すむ牡丹の寺の春の客玉瀾ならぬ妻  
とかくれし

土しろう落つる椿のゆふづく夜野はづれ  
寺によき僧入りぬ  
ものいはで御筆に墨をふくませぬさらば  
の朝のしら梅の歌

具されびこの一里は遠き柳はらながれ二  
すぢ月の春の夜

よる柱わが名きみよぶあまたたび花よ海  
棠かごごをしへむ

堀河や築土しら壁梅わかば姉をはなだの  
被衣に賜ひぬ  
(姉君を京に迎へたまへる水窓の君に)

姉の世に二つをとりし弟君の歌のおほさを泣かれぬる夏（おなじ君に）

宵の子は頭巾ををしむゆひそめ髪浪華の街（ま）の南に長さ

二條北に（ま）大路の月の今出川梅は寒しと倚りにし宵か

夏川はよき子が歌にこぎや馴れし紅花つむ君が里の夕舟

宵の歌は君に（ま）負けたるもえぎ蚊帳（ま）虞氏（ま）の朝ぎぬ花あかき庭

浪華江の後のひと夜は梅にかれなふた夜は歌の吉備の若うど（そこにて逢へる萩舟の君に）



おばしまにぬかをもたする今朝の子にか  
ざさせますな御手のひと花

遠とほびとの女ただ巻くに惜しき指えにし  
の神に春うらみあり

花なの山居やまあやにく人のわかうして鬢むすの油  
のうすし春雨

二十とせのうつつにかへしまぼろしよ京  
にや逢あへる東あづまにや見し

才さいの君戀こひに耻はなき髪かみ五尺歌ごせにつなぎて敢  
てはなたじ

詩うたの春はるの二十はたちむつまじ高野たかの川がは柳やなぎわが髪かみ彩いろ  
波なみつくる

昨日入りし四つのわたちの跡ほそき山の  
木下路宿みえずなりぬ

御墓御墓梅によこぎる谷中みちひそかに  
呼ばむ名の趣味もたぬ

ゆふべ毎の小舟戀なき川なりし和泉をめ  
ぐる水と見る流れ

春老いては鏡にもらす歌ぞ多き二十なり  
ける湯の山の宿

母遠うて睡したしき西の山相摸か知らず  
雨雲かかる

母いつく春をうらやむ梭のうた敷をへた  
てし小椿の家

こむらさき春狎れやすき神と見て御袖に  
そへし詩長きばかり

ひきまますや朝連翹の春の御戸ゆるせなふ  
たり歌に寝たらぬ

明日もたぬ露の武藏の草でもり人わかう  
して夢によるしき

薬師籠り御薬師佛を君とよびてしだれ緋  
桃の日記つむ御堂

返し歌の春よき里の里かりね緋桃二十日  
を花ちらぬ里

梅は髪によき香おもねる朝いふすま啼く  
にうぐひす寵わすられむ

こぶるに笑み痛むるに戀よふに歌かくて  
桂の葉にふさふ我

しろ百合にしらぎぬきせて溪を出づと誰  
が子はたちの山の湯の御記

花みなに眞紅さかする夏のちからいつ移  
りてと血におどろきぬ

戀は紅梅詩はしら梅の朝とこそ湯の香に  
明けし春の山物語

花ぐさにひと夜がたりの頬のはつれ濡れ  
てぞ雨よ母に歸らじ

二十びとの夢のながれの小笹舟いささか  
君を春に導かむ

夏ばな

わかき夏の日には得飽かぬ金蓮花その温  
室みむに鍵もたぬ君

誰が集に誰に秀でし驕りなりしまして思  
へば去年の夏花

石津川ながれ砂川髪をめでてなでしこ添  
へし旅の子も見し

蚊帳に君をおきてふた夏蓮とりて出でて  
は京に紅買ひし里

春日ながし雛のあるじが母とならむ願の  
君のうたたねまもる

夏ばな

竹をくぐる椿の水の小板橋たそかれ見ず  
や紅梅の人

歌は問はじ命婦の職か辨の君か眉黛せめ  
て濃く打ち給へ (以下二首一梅の君  
の京に仕へたまふに)

梨の夜の簫に優頬はしめるとも四位のひ  
とりに歌やりますな

秋



静

垣かきひくし小様の晝のうたたねの和魂わごころさを  
へ八重いと櫻

蚊帳を人にかけては君が戸さし頃を根岸  
へ啼けな野のほとさぎす

そぞろなりや聞きに筆よぶ夜半の歌をかば  
枕まくらになかばをつ襖ふすまに

春の湖髪よき人の夢の魂を載するしら桃  
水篋に遣るな

あづまやのともし火ほそめ思ふことを運  
のうき葉に書きかはしける

桃を脊にほつれ毛あぐる笠の手よゆふべ  
しら壁なにしるさする

誰ならず孔雀のひなに名おはしぬ我やお  
ごりの北のおばしま

うつしうゑし人を夢むや萩のはな汝をだ  
に訪はぬきのふ今日かな

山でらの李はなちる月夜みち笛にひとり  
をのこして下りぬ



川ひとすト菜たね十里の宵月夜母がうま  
れし國美しくしむ

殿のあめ紅梅くろう君しろし油まゐらぬ  
辨は憎まト

御木立の梨のみ白き宮の月索琴の御手に  
すたま泣く夜か

さだすきて宵はづかしき舞の子を花につ  
つみて往ぬ春や無き

人よびて強ふべき傘の雨と降れ夜の一里  
を柳に歸る

しら梅は清氏の君が筆とこそ夜をふさは  
ずの歌のさかしき

しろ芙蓉妻ふりほこる今はづかし里の三  
月に歌しりし秋

琴に宵を誓ふは聖の祭の日筥に譜なきも  
小指は嚙まト

とがありてたそがれ島にながされし小さ  
き花神か待つひとり人

春のかせ近江は情ぞただならぬ人に眺ち  
る里の大津よ

とりし宿の小雨の暮の秋海棠たまくら羞  
ぢし昨夜の子に似たり

野路のはこり朝のふたりの息うつくし武  
藏國ばら霧紅う降れ

欄こえて石の御廊に蔦あをし薔薇がさね  
の裳ひくよ變化

加茂と落ちて欄に分るる高瀬川水の人よ  
ふ夕夏ころも

琴とりては歌高かりし春のひと春の子な  
れば瘦せて戀に眠る

明日は舟にぬなはとるべき近江の子水に  
節よき歌をこそ賜へ(とつぎゆく友に代りて)

宵のうたあした芙蓉にねたみもつよ黒髪  
ながき秋かこり妻

夕戸の子に詩の縁やふれ歸る君か白鳩君  
に人ことづてむ

前世の春をちひさき鐘にちりし櫻もとよ  
り宿命うすき二十とせ  
京の北は彌生にちかき荒びより霞のなか  
に紅梅のちる  
鬢ごしに君が片頬のふれし時むしろけも  
のにならむと思ひし

瘦を説きし腕にかさむやは肩のあれな  
らざれ去年の吉備びと  
春の日を懸想の歌は笑みを呼べどつひに  
さびしき髪ながき人

# 梶花染

一 大和の秋に若き旅人の歌へる

奈良を西の笠に秋見る木津の夕日河船な  
がう名よびし人や

船おりぬもとより水の流にしなければ笠に  
のこらむ歌にはあらずよ

船の子は浪華へ十里秋の水木津の河船ゆ  
ふべをおくる

かくの子にとどめのこりの秋いくつ船に  
ありやを西にまどふ橋



夕橋に入はひとり秋のいる木津川なが  
う大和を行くよ

おつる日やいづこ快樂の夢の里わが橋は  
なれ塞う行く船

伊賀いでし水のする間ふ旅ならず藝術に  
泣かむ明日の東大寺

藝術なにさびしいかなや小笠の子まみえ  
の神に明日の道さる

鑿の香に夜の帳かさむ情あらば木津のゆ  
ふべを霧たてこめよ

木津の橋北へ七つの欄やなにまどひすが  
たを水たゆたふな

冬



音

かりそめの大和の水のゆふわかれ面のく  
れなる歌にさめむや

河でえの夕わかうどの脚<sup>たもと</sup>  
たみは藝術<sup>たぐみ</sup>神<sup>かみ</sup>とこそ

橋を見ず二十<sup>はた</sup>なる子が秋のたび木津の家<sup>や</sup>  
並<sup>なみ</sup>に夢とざされぬ

その船に南をぐらき奈良の山はばきとく  
手に嫉みあらずな

暮を入る古き御京みきやうのものさびや窻やうれふし  
目の子に秋掩あきほへ

神守かみもりの古代こゝろのひと夜奈良にかりて火ひかげ  
日記くる秋の旅びと



盤ひらのかをり御堂みだうのくちのやれとびしら戀こひの  
二十はたの世なれぬ血なり

夕堂ゆふだうの羅漢らかんの君や世ぞあはれ説せくに背そ後ご  
の聲こゑひくき人

曼陀羅まんだらに夕ゆふよる肩よこの秋を旅の子ゆゑ  
の罪つみに瘦しほせされ

塔たにかかる細こあや雲うや奈良ならのひがし情じやうあ  
る旅りよの人は野のに立つ

二春にはかに髪かみおろしける姉あねをいたむ人の歌

雨あめしろう梨なしちる夜よるの姉あねが御手みで鐘かねにかしこ  
さ春はるぞと泣なかる

中の子は佛性あさき春の御堂紫衣の御姉  
を梨に妬まぬ

憂き春の御經ゆふべの奥の院姉と菩薩に  
花ちりかかる

わかき叔母が京をいたみし圓通寺いたみ  
し姉の紫衣みる春か

普門品の春二十五の現し御聲ゆふ鐘など  
て姉を隠さぬ

菩薩の君花に詣での塗り傘の一の人なる  
春や見ませし

花に水に七日の月のひとつ被衣歌の御供  
と宵を出でさな

寺の御階桃ちる月にかぞへ倦みて叔母が  
讀經をまねにし姉妹

しろがさね藤によき夜のおはさむか北野  
に近き姉が京の月

姉が入りし御寺の春のしら壁や藤よふた  
たび御髪を誘へ

ゆるしたまへすがるによわき姉のなみだ  
花ちる宵の堂の勢至よ

大門のとびらにすがる春の日や姉にしら  
藤たそがれ長き

藤すぎて鐘樓にちかき後る御影錦の肩に  
春おちむとす

うつくし

狂ひては百合のひと枝やつくり得し石に  
額あて思ひ知る御名  
君なくば物をおそれの魂とのみに栖む胸  
しらす消えにけむ魂

おどりなりと桂の葉もて枝をもて額は打  
たれむ世なきに似たり  
濃きを召さばふるきもたひの御酒を斟め  
戀にたふとき三とせなる老  
はげし息に小琴は裂かず幸ありてなさけ  
ちからを花に相見る

少女せうごなれば百合はくげにうたがひ神かみに怖おそぢわれ  
らが道みちは歌うたひおくれし

おちいらすばおちすば終つひによるべあらし  
地に傾りまうなき少女せうご女子この戀こひ

ゆめみてかさめてかつよき二人ふたりなりきあ  
ゝ思おもへどもわれ思おもへども

秋あきの里さとは名ななし花はなの香かほ井いにくみてやさし  
む君きみと朝あさの鐘かねきく

夜よになでてとこあたらしと聞きくに足たりる髪かみ  
はうつすな戸との秋あきの水みづ

亡なほびぬるは誰たれがさが故こゝろのよめさ故こゝろの戀こひと  
泣なみだかぬを幸さいちにこそ祈いのれ

戀われに胸にちひさき智慧のひとつあり  
てまごひて敗れよとかも

その御矢にきのふさめたるえにしありて  
白き百合の扉君にひらきし

うしなひし物か得ざりし或るものかそれ  
に似たりと仰ぎ見る虹

### 朝寝髪

男はみな額ひかに桂をまごふ國のむかし語の  
戀にかあるべし

ゆきずりの丁子ちんじゆかしやあけがたの夢に  
見に来む山下やまもと小家こゝら

あゝ驕り高華なる人にやどる思むねに溢  
るゝ我と見けらし

智慧よ疾く汝はほろびし世をうせし挽歌  
に誇る我ならなくに

その胸よ春の香しみしわがいのち寶とす  
るにせまかりけらし

ふりかゝる鬢の風情は汝も見つや鸚鵡病  
みては我に似る瞳

祝ひたまへ少女が春の價おほしわかれむ  
期ある人の名秘めぬ

解し得では玉なるかひなかなしみし髪長  
うては名を惜みにし

さびしみに木蓮おつとすがりぬる山居の  
暮も戀ふる日あらむ  
笑みなきは梭うた胸にみたざるや脊戸の  
緋桃がかしづきの君  
今日しらず子は天雲のともなひと性には  
をしき老の母見し

髪つれなき鏡に今日を思ひ知るは靈たふ  
とばぬ心にあらじか  
古あしと相思の君にわがかけしよしなき  
涙わすれ給はじ  
ひんがしに君ある國を忘れ得ばはたやわ  
が歌神を喚ばまし



したしむは定家が撰りし歌の御代式子の  
内親王は古りしおん姉

こしかたやわれおのづから額くたる謂は  
はこの戀巨人のすがた

歌なきはわれあめつちに君を得て戀を戀  
ひしにあらざる故か

天にてか今宵のごとき夜にぞ見しみにく  
き神の衣に似る雲

牡丹こそ尺にさかずもありぬべし聖旨う  
けては力をわぶる

戀するに持つも要なきつよき力すてゝ桂  
の根をこやしませ

やはらぎの長きに栖みて世を知らず悲曲  
ひと巻いつはり拙な

眼のかぎり春の雲わく殿の燭およそ百人  
牡丹に似たり

ふたゝび無き少女の春は何と説く戀を二  
様にかたり得る君

柳ごしに見るは山はふ大文字洛中出ては  
妻とこそ添へ

白虹の秋の日をさす眼は父に春のうれひ  
の母おびし眉 (光がうつしるのうらに)

わが額に冠よそほふ君とこそたのむ雄姿  
老にやりますな (光にかはりて碎雨の君に)

春野夏野われと御座はえらび給へ藝匠わ  
かうて鑿あらしき神

よきひとの三十路にのこすふたとせは荆  
棘がもてる千とせなるべし(亡き姉のおもひいで)  
をしへ給へ永劫笑まね君かとぞ問ひなば  
石はためらふまじか

春の神のまを兒うぐひす嫁ぎくると黄金  
扉つくる連翹の花

をこめなれば姿は羞ぢて君による靈は天  
ゆく日もありぬべし

變りあらむ君かや身かや人の世にしばし  
ば春は來てもうつろへ

ひとつ身をわれのみ罪に召すものか御意  
か聖旨か今日かれし才

兄が世は御室の宮の御弟子僧都扇折る子  
にやまぶき咲きぬ

ためさむはわがものおほふ力とや憂きぞ  
いよいよ新たなれ春

帝を傷め鳥の孔雀よ世にひとつわれとも  
汝ともよそへにし君 (ウイクトクヤ女皇の御像に)

「うたがひ」はこの世の春のうたびとを「神に  
解る奴僕」と過ぎぬ

あめつちの戀は御歌にかたどられ完たか  
るべくさくら花さく

ほこりてはひろふにをゆびためらひき玉  
とは人をあゝ見てしかど

緋芍薬ひしやくやく魔がさす毒をうけしより友のうら  
やむ花となりなき

あやしむなわれと火焰ほのほにやかれては姿ぞ  
ほそきひと重芍薬

戀しては王者をよぶにかわびず龍馬りゅうまきた  
ると春のかぜ聴く

○  
みだれ髪と讀む

みだれ髪を讀む

なにかし

「明星」の女詩人晶子鳳氏の歌集「みだれ髪」は、瀟洒たる一篇の美本に綴られ、嶄新の聲調、奇抜の思想を歌ひ、この夏文界の寂寥を破りて、殊に歌壇の語り草となりぬ。兎角の世評、われは讀み破らむ根氣も無けれど、慙態を歌ひ、戀情を煽るに過ぎずと、おほまかの月旦に言ひけたむとする今の評家は、日頃の

文藝論、審美説にもふさはしからず、かかる折にのみ道學先生の口吻を模ぬる可笑しさよ。

明らさまに言はば、今の短歌、新體詩の類は、わが好まざる所。命なく、心なく、偽多く、品つくりて、たけ高き言葉に釋げなる思想を蔽ひしのみなる青年の作に、何の慰藉、闡明かあるべき。試に今の名ある新體詩家の作を讀めば、評家の漫に稱揚して高潔雄渾なりとするものは、概ね、生硬なる修辭、情熱燃ゆるが如しといふものは、散漫なる放言に過ぎず。高俊は汚穢を厭離して達すべく、熱烈は煩悶を闊して企圖すべきに、人生の奮闘に與らず、又は心裡の疑惑

と戦ひ、精神の葛藤と、相撲はざる者、自らの力を計らずして、急に古大家と駢馳せむとす、また難いかな。聲は細くも、沈みたりとも、材は世の常の情なりとも、真情こもりて、假り聲ならぬ歌こそよけれ。

又短歌を詠む者の一派には、平凡の思想に安じて、俗詠の範圍に跼蹐たるもの多し。風景は世の常の「畫らしき」山川に限り、人情は咎めなき君臣、父子のきはに止りて、熱情の溢るるなく、深沈の反抗無く、疑惑の終局を究め盡さむ勇猛力なくして、巾幗者流の思想に媚ぶるのみ。これらの歌の田には農あり、山には花あり、庵に僧ある道具立もうるさけれど、何時も少女の純潔を歌ひ、忠



臣の高義を頌し、師を思ひ、友を忍び、榮華を卑み、名聞を誹りて、偽善に非らざれば、世間見すなる似而非歌こそ厭はしけれ。詩人は情熱に富まざるべからず、此故に執着あり、憧憬あり。詩人は色相を以て生命とす、此故に其瞳には驕樂の影を寫し、其頭には榮華の夢を宿さむ。而してなほ一步を人生の幽境に移し、理性の綜合、雄大の規模を有して、他界の冥想に解脱を得るに至り、茲に始めて大詩人の班に列すべし。

わが文藝趣味の中心此の如くなれば、今この歌集を翻へして、其奔放なるに驚かず、熱意かくばかりにして、始めて歌を物すべしと感ずるものから、唯時に

例へば、すががきのふと調べ亂れたる如きを憾むのみ。又聲調の奇抜なるに感じて、革新の英氣勇猛なるを賞で、われも人も、此轉移の日に生れあひて、身のなほざりを厭はず、辭の足らぬことを犯して、新語、新文脈を創作せむとする苦心を察するものから、あまりに難解の新調、終に思想の展開を完うし得ざらむを恐るゝのみ。又おもふ、此集の作者は、おほひ難き歌の才、なみならぬ思想を持ちながら、晦澁の危険を冒してまでも、なぞや身を短小の詩形に縛したるかど。最終にまたおもひぬ、歌に抒情の叫あるはよし、真情の暴露あるもよし、されど天真爛漫といふ賞賛の前に、其天真と稱する者、果して如何な

る性質のものなるかを吟味せざる可からずと。

「胭脂紫」「蓮の花船」「白百合」はたち妻「舞姫」「春思」等の命題既に特趣を帯びて、物新しき心地あらしむ。最も解し難きもの第一、最も解し易きもの第五、されど集中の歌、概ね再讀を要して始めて味ひ得べし。

夜の帳にささめき盡きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

冒頭の一歌、解し難かり。定かならぬ臆測ながら、これは作者の大氣焰と見て差支なかるべきか。われは謫仙なり、さきに天界の歡樂をつくし、「夜」の帳のうたげに飽きて、暫らく身を南瞻部州に下したれば、今、閻浮提の夢安からて、

戀の惱に煩ふなりといふなるべし。

歌にまけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ子

奔放の意盛にして、道學先生に與ふる挑戦なるべく、第三句に西文の姿あり。かくてやうく讀みさしゆけば、このあたり「神」といふ文字甚だ多く、「春の神」「夜の神」は何れの國の神話にも見當らぬ、作者の方便なるべけれど、かゝる尊き名は、意味無くして漫に唱ふべきに非らず。

やは肌にあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

此集の基絃弾じ得て明らか。「寂しからずや」とは枯淡なる凡骨を罵り得て妙。

「第一の石を投げ得る者」世間幾人ぞ。

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿まひどのあならぶ子らよ東あづかの間老いな

僧正遍昭を明治の調にてゆきたるもの、あすはけふかや、摘め摘め薔薇をの想  
なり。

なにとなく君に待たるゝ心地して出でし花野の夕月夜哉

戀ならぬねざめたたずむ野のひろさ名なし小川のうつくしき夏

調は前者に整ひ、想は後者に秀つ。

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるるはつらき人の世のまぬ

げに「今を下界の人」なればとて、斯る容態もさることながら、われは

小傘とりて朝の水くみ我ごこそ穂麥あをあを小雨ふる里

の景情、趣あるを擇ばむとす。

「蓮の花船」のうち

御袖ならず御髪みぐしのたけとまきこえたり七尺いづれ白藤の花

「まきこえたり」とめでたし。大鏡などに讀みし、某の宮にも劣るまじき姿とおぼゆ。

一つ篋かたにひひな納めて蓋ふたとちて何となき息桃いほにはばかる

佛蘭西の尼寺すみの女學生にもふさはしく、

師の君の目を病みませる庵の庭へうつし参らす白菊の花

は、菊畑といふ幕なるべく、虎藏にはだれがなる。

白檀びやくたんの煙こなたへ絶えずあふるにくき扇を奪ひぬるかな

藤壺對面の場を憶はしむ。但し扇といへば朧月夜なるべし。

かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやうくなりけるかな

「けるかな」の桂園流も、かゝる時の辭としては要あるものか。

道たま〜蓮月が庵の跡に出でぬ梅に相行く西の京の山

作者が地名を讀入るる巧みあらはる。「清水へ祇園をよぎり」ほととぎす嵯峨へ

は一里」の句もわろからねど。

四十八寺その以と寺の鐘なりぬ今し江の北雨雲ひくき

五月雨ついでに築土つちくづれし鳥羽殿のいぬるの池におもだかさきぬ

前のは上の句、後のは下の句、和歌に珍らしき趣あらずや。作者の歌の後景には、王朝の夢を浮ぶる古寺名利あり。若葉木立の盧遮那佛を咏する人、櫻花ちる層塔のゆふべをなつかしむ故なきにあらず。

白百合の春、「はたち妻」の彩豊かなるに及ばず。

夕ぐれを花にかくるる小狐のこ毛にひびく北嵯峨の鐘

下京や紅屋が門をくぐりたる男かわゆし春の夜の月

は、此集の好調なるべく、たゞチチアンの名はつらかりき、五山の僧の口おそろしき、春にがま貝多羅葉をまきて、何故泣きしか、けしきばみたる譏「なまにしもあらず。」

扇の陰のみやづかへ、「舞姫」の巻、艶を以てまさりぬ。

朝を細き雨に小鼓おほひゆくだんだら染の袖ながき君

新道をゆく子の燕口をよみしなるべく、世には今だんだら染の流行するを、流石女性の眼するごし。「紅梅に金糸の縫の菊づくし五枚がさね」は少しいぶかし。

おほづつみ抱へかねたるその頃よ美き衣きるをうれしと思ひし

よくいふ事なれど、歌には珍らしき大鼓を抱へたりとあるは嬉し。

「春思」の巻、こゝも奔放の歌さには、解し難くして作者の註を乞はむと思ふいと屢々なれど、光焰ある佳調また乏しからず。

ぬしや誰れねぶの木かげの釣床の網のめもるる水色のきぬ

「讀賣」の小説に憂身を簍し給ふ令嬢むきならむ。

卯の花を小傘にそへて褙とりて五月雨わぶる村はづれかな

浮世繪をひねる近世思潮派の好なるべし。

春の宵を小さくつきて鐘を下りぬ二十七段堂のまさはし  
を秀れたりと見しは僻目か。終にのぞみて、難解の歌一首を掲げむ。

結願の夕の雨に花ぞ黒き五尺こちたき髪かるうなりぬ。

面白き調なれど、優婆夷の歌かとも覺ゆるのみにて、花の黒きに禪味なりとも  
翔すべきにや。

「みだれ髪」は耳を敬てしむる歌集なり。詩に近づきし人の作なり。情熱ある詩  
人の著なり、唯容態のすこしほのみゆるを憾とし、沈靜の欠けたるを瑕となせ  
ど、詩壇革新の先驅として、又女性の作として、歡迎すべき價值多し。其調の

夏花に多くの戀をゆるせしを神悔い泣くか枯野ふく風  
新体詩家のすまさうな歌。

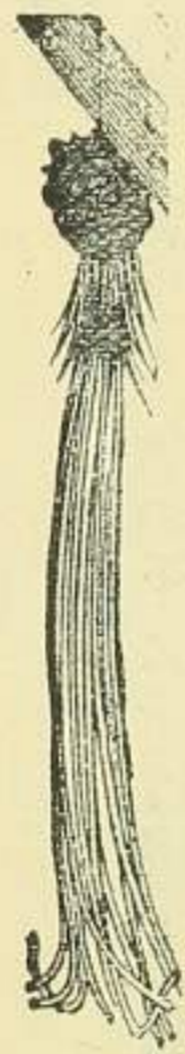
「魔に向ふ劍の束」春の子、血の子、焰の子などは調子の狂ひなるべく、大御  
油」の文字、典據疑はしく、「なでよの櫛」などは「はづしますなの枕」と並ひて、何  
とやらして猪牙ちよぎとやらの類、惡落わるおちこゝに亦無きにもしあらず。

道を云はず後を思はず名を問はずここに戀ひ戀ふ君と我と見る

作者の氣焰こゝに至て當るべかざらむとす。冒頭の謫仙歌、第二の挑戰歌とい  
とくみなり。されど評者は、

奇峭と其想の奔放に憫<sup>あは</sup>れて、漫に罵倒する者は文藝の友にあらざるなり。

發行者云ふ、こは晶子女史の第一集『みだれ髪』の出でし當時、雑誌『明星』に掲げられし所なるが、この匿名氏は文學士上田敏氏なりき。



### みだれ髪をよみて晶子女史に寄す

それがし

鳳氏晶子女史、僕、生を市井の間に托し、帳簿を盾とし、牙籌を戟とし、風塵の衢<sup>ちまた</sup>に逐鹿するもの、元より晶子其人を知らず、實に文藝に於て解する所無し。舊臘十月中旬、京阪よりの歸途、偶、歌集紫、みだれ髪、及び雜誌明星第十六號を年若き手代より得、爰に始めて女史の名を知り、萬葉以來、世に出づること

と少かりし新奇の聲調と、奔放の着想と、性情の流露に驚喜し、文によりて人を想ひ、人によりて事を思ふ。即ち此の一篇を草して、みだれ髪集中の幻影たる晶子に寄する所以。若し夫れ、幻影の晶子と、實際の晶子と一致するか否かは、僕の顧みる所にあらず、晶子足下、此の文を見て、謫落仙女が下界の男子を戯弄する幻術の巧妙なるを自負せずば多幸なるのみ。

臙脂紫、春思の兩章、色彩豊麗にして、光焰萬丈なり。げにや、夜の帳にささめき盡きて、人界に降下し、戀を生命とせる晶子其人の事にしあれば、みだれごこち、まごひごこち頻にして、枕に鬢のほつるるよ。その子二十櫛はたちに流るる黒

髪のおごりの春のうつくしきかな。『鏡に三峽の雲を分ち池に崑崙の雪をうつし、われとみこるる姿かな。才ありなさけある骨高き大丈夫よ、來りて相戀せずや。』歌にきけな誰れ野の花にあかきいなむおもむきあるかな春つみもつ子。』天には雲、夕日にあやごる空をうつくしといはずや。野には花、誰か紅芬紫英の美を否む。人には戀、いよよつのりて、いよようつくしまわづらひならずや。『やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道をこくきみ。』情動は人の生命なり。廣く情動の障害を除むかとする定案を指して道といひ、若くは情動の無私の流露を指して直に道といふ。情動の他に説くてふ君が道とは枯木のみに

二十櫛に流るる黒



死灰のみ、生命なき死法則のみ。道を云はず後を思はず名を問はずここに戀ひ戀ふ君と我れと見る。戀は性情の流露なり。花の春にひらき、鳥の花に鳴き、虹の雨後に現はるるが如く自然なり。されば成敗利害の小我を超脱して真情の流露を恣にせむとするの我は、かの義理や、のぞみに制せられ、真情の焔に水うちて、思はぬ人ともそひごぐる貞女の人々を、正しといひて、美しとも全しともいはず。人皆は我れを學びがたく、我れも亦人となり難し。わが胸底の無限の懊惱を問ふこと勿れ。我れは只だ奔放自在に心中の至眞を流露して、天地の美をひらき、人情の枯渴を醫せむとする女詩人晶子其人なるをや。わが

戀を卑しといふか、聞け。人の子にかせしは罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき。わが戀を濫すといふか、聞け。わかき子のこがれよりしは鑿ののみにほひ美妙の御相みそけふ身にしみぬ。罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながくつくられし我れ。擾々たる世間元より卑淫の戀あるべし、虚飾の戀あるべし、不全の戀も亦多かるべし。然れども人間何づれの所にか多少の戀なからむ。況んや樂しむべき花の春日に於てをや。既に多少の戀あり、豈滿腹の同情なからむや。春の宵をちひさくつきて鐘を下りぬ二十七段堂のきざはし。………臙脂紫、春思、兩章紙背の幻影が、玉口まさしく且つ歌ひ、且つ主張する所此如き

にあらずや。

さあれ晶子も亦人の子なり。心、白雲の高上を追ふと雖も、足、塵界の累縁を絶つ能はず。戀の奔放を快うする吟哦の内面には、無限の幽恨を寓し、滿眼の情涙を湛ふるを見る。『ゆあみして泉を出でしやははだにふるはつらき人の世のきぬ。』宛然として巫山の神女なり。『みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす。』倏忽として市井の娘子にあらずや。『夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とり給へ。』『ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴とおぼせ眉やはき君。』こは遊仙窟美人の風趣にあらずして、寧ろ露伴氏作對鬪

體中のお妙其人の如く行ひすまし、さとりすましたる光景、而もこれ才媛人を欺くのみ。『ここに三とせ人の名を見ずその詩よまず過すはよわきく心なり。』蓋し是れ中心の眞秘密なるべし。『手をひたし水は昔にかはらずと叫ぶ子の戀われあやぶみぬ。』己れ失戀の涙痕あるにあらずむば、焉むぞよく他が戀愛のもろかるべきを忖度するを得む。『消えて凝りて石と成らむの白桔梗秋の野生の趣味さて問ふな。』讀むで此處に至り、世にうらぶれし此の女詩人の爲め、誰か一掬の涙なからむ。凡そ人、多面を有し、矛盾を具ふ。矛盾に韻あり。多面に妙あり。而も下界に降りし星の今を、しのぶのみだれ限りしられぬことと思の外に、

或時は「そのなさけかけますな君」とひく手を拂ひ、秋の野生の白桔梗は、尼寺の主人の心がけぞとも思はるるを、「下京や紅屋の門をくぐりたる男かわゆし春の夜の月。」と歌ふなど、一面には白露のさびしき味を忘れずして、一面には熱烈の愛慾に執着する晶子其の人の如きは、世に稀に見る所にして頗る感歎驚異に價すといふべし。恨むらくは其の戀をうつして、世とたたかはむの意氣、時に奔放に過ぎたるの嫌あることを。「春みじかし何に不滅のいのちぞとちからある乳を手にさぐらせぬ。」君さらば巫山の春の一夜妻またの世までは忘れぬたまへ。」かくては、逸興あまりありて、清婉の致を失すといふべし。又恨むらく

は、時として歌に何となき弱みのほの見ゆるものあるや。「今ここにかへりみすればわがなさけ闇をおそれぬめしひに似たり。」胸の清水あふれて遂に濁りけり君も罪の子我れも罪の子。」但しこは僕のひがめにやあらむ。敢て明星紙上歌ものがたり子の註釋を乞ふ。

蓮の花船の一章に至りては、女史が年若く可憐にして、風流なる娘子たりし時代の、生活の交遊の寫真にあらざるか。臙脂紫の濃麗なく、春思の逸興無しと雖も、清秀幽婉の文字反て喜ぶべきを見る。地、京都にして池に、紅蓮、白蓮あり。我れ、寺院の近傍たるを想像す。額しろき聖、うら若き僧、尼となれる叔

母。我れ、女史が想の往々抹香くさきいはれを解す。眼をやみませる師の君、花の蓮船こぎかへる兄、籠へ鳥よぶ妹、門唄に梭の手こめしわれをわらふ姉、巖をはなれ谿を下りて水に別れし都の繪師、白檀のけむりこなたへ絶えずあふる人、われ以て、女史が家庭交遊の彷彿を想像す。「人まへを袂すべりしきぬでまり知らずといひてかかへてにげぬ。」「ひとつ篋にひひなをさめて蓋ごちて何となき息桃にはばかる。」「是即ち、女史が嘗て自慢の練の下襲につつみにし、神よりもにほひ高き朝の消息にあらずといはむや。」「春はただ盃にこそ注ぐべけれ智恵あり顔の木蓮や花。」「春かぜに櫻花ちる層塔のゆふべを鳩の羽に歌そめむ。』

かくて女史が春思頻りに動きて、到底寺院に近く温馴なる日月を送るに堪へざりしを知る。「小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひ虹あらはれぬ。」「境も、想も、調も、宛然として奈良の朝なり。世間偽善詩人の、えていひ得る所にあらず。見て衛風桑中の景となすは、名工の裸體畫を卑猥と観ずるの類ならむ。」「かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやふくなりけるかな。」「油のあと島田のかたと今日知りし壁に李の花ちりかかる。」「世路風波起り、天、若くは女子をして情海に棹すの直路を失はしめんとするか。はた、女史が胸中に、懊惱の靈火を投じ、女史をして、ますます詩人たるの火焰を放たしめんとするか。白

百合の章は、思ひ思ふ人、女二人、男一人、京都に會せし時、又は其の時を思ひ出でての歌なるべし。『三たりをば世にうらぶれしはらからとわれまづ云ひぬ西の京の宿。』旅宿といへば女史が家にてはあらざりしならむ。『今宵まくら神にゆづらぬやは手なりたがはせまさじ白百合の夢。』いかに情交の高潔なるよ。『かの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲なきか西の京の山。』思を馳するの切なる、帝子、瀟湘に虞舜を忍ぶにも似たりけり。そもそも若狭の友とは、詩集紫中に其の名の見ゆる、登美子の君なるべく、白百合の夢を見せられしは、紫の著者鐵幹其の人のやうにも見え、鐵幹よりも年若き少年のやうにも見ゆ。元より雲

霧をへだてて人物を物色す。當るも一興當らぬは一層の興味ふかかるべし。鐵幹子何人ぞ。其の姓を見れば、丹後の人らしく、其の歌をよめば、岡崎、興津の邊に流寓し、佛門に身を托せし事もあるべく、『秀でたる御弟子のなかにわれひとり十とせ學ばす衣ころもやぶれたり。』其の人の風貌見ゆるが如し。『髮かみさげしむかしの君よ十とせへて相見るえにし淺しと思ふな。』とあるに見れば、師の君の御袖によりて、興津の雪にほほ笑みしも亦、幼少の晶子にあらざるか。西にては戀しさに、百二十里をそぞろきぬといふ人あらんを望み、東にては、この雨を百二十里の西にても、ひとり聽きつつ、泣くものあらんを想像す。此の間、豈

一氣の貫通するなからむや。『あめつちに一人の才と思ひしは淺かりけるよ君にあはぬ時。』李杜時を同じうして出づるの抱負も亦大なるかな。借問す、天上の牽牛と、織女と相伴ひて、下降ましませしものならむには、よし、星のあふせのはかなくも、相思ふべき人は、ここに限らるべきに、一は、多端の戀に雲鬢花顔にほつれ、他は、夢は戀に、おもひは國に、身は塵に、二十年の長き、さびしさを知らず、意氣づく、劍のまへ、韓京の虎穴に入り、日頃親みける、美しき韓の妓翡翠が衣をかつぎて王城を逃れ出で、其の移り香を今にわすれぬ、情け知りの勇士なるは何ぞや。『戀といふも未だつくさず人と我れとあたらしくぬ日

の本の歌。『好漢よくぞ道破せし。君がくぢら汁、白梅の花と共に好愛すてふ妹の丸鬢は、勿論女詩人其人にあらじ。凡そ物、平を得れば即ち鳴らす、吾人は兩間の吟哦の爲めに、この兩詩人の前生は、牽牛織女にあらざること祈るや切なり。思ふに、鐵幹子と晶子と、境遇性情相類し、精神意氣相投じ、獨創の才相如き、構想の妙相敵す。唯、晶子が歌の奔放懊惱の中に、自ら優揚の態度あるに異り、鐵幹子の作は、剛健高華の中に、何となく沈鬱頰挫の聲調あり。是れ鐵幹子が境遇經歷の數奇なる、晶子其の人に數倍するを示すものか、非か。而して、晶子の集には『あら鷺の一つ飛ぶかた見おくりてわがたつ巖に秋の潮

よる。』の豪壯無く、鐵幹子の作には、『なにげなく君にまたるるこちして出でし花野の夕月夜かな。』の優麗無し。両性の別、元より然らんのみ。『手をあげて魔を打たんには我れのあり人よ袂のかけにほほゑめ。』さなり、さなり。勉めよや、  
両新詩星。

はたち妻の一章、最も紅涙紫恨に富む。されど一切著者の經歷を知らざる吾人讀者には、はたち妻てふ題目の意味だに、明かには解しがたかり。『神ここに力をわびぬとき紅くべのほひ興がるめしひの少女やとめ。』これ單に客觀的に解すべき歌なるか。妾は、既に世間普通の戀愛に瞑目せるものなり。然れども、時に觸れ、人に

應じ、紅魂芳情の動きてやまさるものあり。神も之を制止せんとして、力の足らざるをわぶるは、この魂、この情の、神よりも高きものあるによりて然るか。かく解釋して、吾人は此の歌の詞底に、無限の神韻と、涙痕とをみとめんと欲す。『ふた月を歌にただある三本樹加茂川千鳥戀はなき子ぞ。』『行く春の一絃いんげん一柱ちにおもひありさいへ火ほかげのわが髪ながき。』何等纏綿悲哀の聲音ぞ。『庭下駄に水をあやぶむ花あやめ鉄てつに足らぬ力をわびぬ。』何等憔悴の容態ぞ。『淵の水になげし聖書を又もひろひ空仰ぎ泣くわれまごひの子。』何等煩悶の光景ぞ。『なさけあせし文みて病みておそろへて斯ても人を猶戀ひわたる。』果然、失戀の人ぞ

かし。『もろかりしはかなかりしと春の歌焚くに此子の血ぞあまり若き。』活路を一方に求め得たるものか。唯氣がかりなるは、『そのなさけかけますな君罪の子が狂ひのはてを見むと云ひたまへ。』『今日の身に我をさそひし中の姉小町のはてを祈れと去にぬ。』等の數首なり。こは、上記の失戀と關係あるにや。關係なきにや。罪の子とは、いかなればいふにや。玉顔瓊才、卓文君、清少納言の流をくみつと見るに、而も亦、何事をか小野小町にかたごらんといふ。なべて、みだれ髮集中の歌には、聲調高妙なるも、其の境景を明解しがたきもの頗る多かり。就中、はたら妻の一章を然りとす。吾人は、著者が獨創の歌才を讚歎すること

同時に、どうせ、世に出さむ歌ならば、今少し解し易かるやう結構し、歌によりては、伊勢物語流のはしがきを附せられむことを企望す。然らざれば、作家が繪さがし的苦心を讀者に強ふるの罪、決して輕からざるなり。舞姫の一章は、純然たる客觀的の作なるべし。『淺黄地に扇ながしの都染九尺のしごき袖よりも長き。』『まこと人を打たれむものかふりあげし袂このまま夜をなに舞はむ。』總じて素人、わけても婦人は、猜忌の眼を一般の遊女に向け、彼等が男子の爲め、浮世の爲めに強ひらるゝ、憐むべき弱點のみをとりいでて、一概にいひおとして賢こぶる習ひなるに、女史が専ら鴨東の花といふべき舞妓



こもの美しき姿態と、あどなき動作とを風味し、ミューズの支配の至る所にあまねきをあばきたるは、いかに公明の心胸ぞや。況んや又、彼等が盛装逸樂の裏面をよみて、「人に侍る大堰の水のおばしまにわかまうれひの袂の長き。」「舞ぎぬの袂に聲をおほひけりこゝのみ闇の春の廻廊。」と歌ふに至りては、其の同情の深厚なる、人をしして、一讀三歎せしむるの妙あり。思ふに、女史が筆、今や絢爛の極にあるべし。吾人は、女史が今生の、倍、曲折光彩を加へて、吟哦の之に伴はんことを望み、女史が詩境の漸々擴大し、よし女史が本領は、春情、紅患、芳恨、香淚、鳴琴、淨几、百合、芙蓉、…例へば、光琳、チンヤンの畫の

如く、すべて濃麗高華なる方面に存すとすも、其の泉なす湧き出づる思は、索莫たる秋原にも、太古に近き深山にも、あら磯に四季の花咲かす波濤にも、百年の風雪に傲る松栢にも、其の他、至らぬ隈無く波及せんことを望み、且つ其の陳腐の故を以て、強ひて嫌はせ給ふらしき、春の櫻や、秋の紅葉にも、相當の愛顧を垂れさせ給はらむことを、さほ姫、たつた姫に代りて哀願し、又其の同性に對する同情は、鴨東の舞姫に止まらずして、貴夫人、奥様、未亡人、令嬢、女學生、看護婦、女工、婢妾、藝娼妓一切の女性の爲めに、高く神妙の思を振ひ、無限、清婉のしらべあらむことを切望す。以上。

發行者云ふ、これまた當時の雜誌『明星』に寄せられし所なるが、この匿名氏は、時の書肆普及社長山田禎三郎氏なりしこと、後に至りて明になりぬ。

明治三十七年一月一日印刷  
明治三十七年一月十五日發行  
明治三十八年三月一日印刷  
明治三十八年三月十日再版

小扇與附

金三十五錢

不許複製

著者 與謝野 品子  
發行者 金尾 種次郎  
印刷者 谷口 默次  
印刷所 株式會社大阪活版製造所

東京市神田區西今川町二番地  
發兌元 金尾文淵堂出版部  
大阪市東區南本町座學前南  
發賣元 杉本要書店

